

教育・研究等業績一覧

履 歴					
フリガナ	ハシモト マコト	性別			
氏名	橋本 信	男	生年	1949年	
所属	農学ビジネス学科	身分	教授		
学 歴					
年 月	事 項				
1973年3月	北海道大学 文学部 哲学科 卒業 文学士				
1975年4月	北海道大学 文学研究科 修士課程 入学				
1977年3月	北海道大学 文学研究科 修士課程 修了 文学修士				
1978年4月	北海道大学 文学研究科 博士課程 入学				
1984年3月	北海道大学 文学研究科 博士課程 単位取得修了満期退学				
職 歴					
年 月	事 項				
1981年4月～ 1987年3月	札幌学院大学 ドイツ語担当非常勤講師				
1987年4月	北海道拓殖短期大学 農業経済科 助教授 採用				
1987年4月	深川高等看護学院 哲学担当非常勤講師 現在に至る				
1990年4月～ 2005年3月	名寄短期大学 哲学担当非常勤講師				
2000年4月	拓殖大学北海道短期大学 環境農学科 (学科名改称) 助教授				
2000年10月	拓殖大学北海道短期大学 環境農学科 教授 現在に至る				
2007年4月～ 2009年3月	専修大学北海道短期大学 グリーン・ツーリズム担当非常勤講師				
2009年4月～ 2013年3月	拓殖大学北海道短期大学 環境農学科長				
2013年4月～ 2014年3月	拓殖大学北海道短期大学経営経済科学科長補佐				
2014年4月～	拓殖大学北海道短期大学農学ビジネス学科地域振興ビジネスコース長				
教 育 業 績					
1 担当授業科目 (2016年度)					
科 目 名	出講場所	期別	曜日	時限	備 考
キャリアスキル	301	前期	月	2	
1年ゼミナール	301	前期	木	4	
2年ゼミナール	301	前期	木	3	
ビジネス実務演習	202	前期	水	3	
地域プロジェクト・地域特別演習	301	前期	木	5	
文章表現法	101	前期	月	3	
食農社会論	101	前期	水	4	
キャリアスキル	302	後期	月	1	
1年ゼミナール	301	後期	木	4	
2年ゼミナール	301	後期	木	3	
ビジネス実務演習	202	後期	水	3	
哲学	202	後期	月	2	
学問と人生	301	後期	火	1	(保育学科)
グリーン・ツーリズム論	201	後期	火	4	
哲学	202	後期	水	2	(環境農学コース)
地域特別演習	301	後期	木	5	

<p>2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>1) 現行授業の目標 担当する科目の内容に応じた授業の目標をそれぞれに設定し、講義要項に明記しているの、ここでは一般的に記述する。授業の目標は受講学生が当該科目の基本的内容を修得すると同時に個性的な仕方でも修得できることに置かれる。そのためには、授業内容が受講学生にとって生き生きとした具体的内容であることが求められる。身近な事例や映像などを使いながら、一人一人の学生の心に伝わるような、授業を通してのコミュニケーションが成立することを目指している。</p> <p>2) 教育効果 上記の工夫と努力によって、学校教育で教えられる知識などは社会で役に立つものは少ない、という一般学生の先入見を打破し、自らが学ぶことに確固とした自信を持つ事を教育効果として狙っている。学んだことが自分の実・身になる事を意識すると、学生は持続的で強い興味・関心を抱くようになる。</p> <p>3) 自己評価 上記の現行授業の目標と教育効果の設定は有効であると実感している。授業を通して、学生とコミュニケーションが取れていることが実感され、多くの受講学生には不満はあまりないように見える。しかし、少なからぬ学生が何らかの不満を持ち、授業の狙いと内容に関して不明瞭さを覚えている場合も見られ、学生の実態に応じた、不断の改善を怠らない努力が求められているとも実感する。 授業全体の雰囲気や学生と教員の生きたコミュニケーションで成り立っているということがお互いに明瞭に実感されるようにしたいものである。</p>																						
<p>3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み</p> <p>(記述式：900字以内)</p>	<p>1) 現状の説明：「グリーン・ツーリズム論」を事例に この授業はグリーン・ツーリズム実践者を特別講師として招き、実際の現場の話をしてもらうので、学生の満足度は総じてきわめて高く、大学と地域との連携を体現する授業であるという特長が好評の一つの要因であると考えられる。 この授業の狙いは北海道をはじめとするグリーン・ツーリズムの取組みの現状を現場の人の話を通して実感的に理解するとともに、農業の6次産業化などの新しい方向性としてのグリーン・ツーリズム展開の基本的理解を獲得することにある。この狙いが一応達成されていると思われるが、多面的な理解が必要とされるだけに、実践の全体像と方向性の明快な理解のためにより一層工夫・改善する必要がある。</p> <p>2) 改善への取り組み：「哲学」を事例に 「哲学」という科目は必修科目であるので、関心の有無に関わらず履修しなければならない学生がほとんどである。このためにとりわけ分かりやすさと面白さが求められている。 自ら考える労を引き受けることで視野が広がり、一種の解放を味わうものであることが実感できることに留意している。そのために、身近で具体的な事例や視覚的情報などを活用した分かりやすさと説明の明快さにより一層努力しながら、毎回の授業レポート・読書レポート・課題レポート提出に結実することを重視して、授業における双方向性のより一層の改善充実強化に努めたい。</p>																						
<p>4 教科書、教材の作成状況</p> <p>(記述式：300字以内)</p>	<p>教科書は採用していない。受講学生の状況にふさわしい教科書を自ら作成する必要も感じるが、時間と力量の問題で困難である。 教材の作成については、BB アップを前提にしながらも、必要に応じて板書をしてビデオ視聴を行なう場合と、パワーポイントとインターネットを利用して行う場合との両方を科目の性格と内容に応じて使い分けている。二つの方法にはそれぞれ特長があり、併用することでそれぞれを十分に活かすことができ、より一層効果的であると考えている。五感に訴えることと身近な具体的事例の活用とによって、事柄をしっかりと実感的に理解できるような授業内容改善により一層努めたい。</p>																						
<p>5 学生の指導（課外活動・厚生補導等）</p> <p>(主要10件以内)</p>	<table border="1"> <tr> <td>1987年度～1990年度</td> <td>剣道部顧問</td> </tr> <tr> <td>1991年度～1999年度</td> <td>ソフトテニス部顧問</td> </tr> <tr> <td>2003年度～2010年度</td> <td>卓球部顧問</td> </tr> <tr> <td>2007年度～2008年度</td> <td>社会科学研究会顧問</td> </tr> <tr> <td>2005年度～</td> <td>食農研究会顧問</td> </tr> <tr> <td>2016年度～</td> <td>ハンドボール同好会顧問</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> </tr> </table>	1987年度～1990年度	剣道部顧問	1991年度～1999年度	ソフトテニス部顧問	2003年度～2010年度	卓球部顧問	2007年度～2008年度	社会科学研究会顧問	2005年度～	食農研究会顧問	2016年度～	ハンドボール同好会顧問										
1987年度～1990年度	剣道部顧問																						
1991年度～1999年度	ソフトテニス部顧問																						
2003年度～2010年度	卓球部顧問																						
2007年度～2008年度	社会科学研究会顧問																						
2005年度～	食農研究会顧問																						
2016年度～	ハンドボール同好会顧問																						
<p>6 その他</p> <p>(主要5件以内)</p>	<p></p>																						
<p>研 究 業 績</p>																							
<p>1 研究分野・活動</p> <p>(記述式：350字以内)</p>	<p>研究分野として、哲学研究（特にヘーゲル哲学研究）、グリーン・ツーリズム論研究、民衆史運動論研究の三つの分野がある。 これらはそれぞれに独自の分野として研究されなければならないとともに、「社会の近代化」および「生命の人間社会的継承」という視座から相互関連を有した領域横断的な総合研究を構成しうるものであり、「現代世界の生命＝生活過程論」として統合されると考えられる。 現実の教育活動と地域との関わりからしても、これら三つの分野の独自研究と総合研究の双方が求められていると考える。</p>																						

(その他)					
グリーン・ツーリズムによる都市と農村のコミュニケーション	単	2007年3月	北海道有機農業技術研究年報2006年度版	ヨーロッパの余暇滞在型グリーン・ツーリズムと比較すると、農業・農村体験型の交流活動である点に日本のグリーン・ツーリズムの特徴があり、そこにグリーン・ツーリズムが日本で果たすべき役割が示されている。(p.158-165)	
共感生む出会いに未来が見えるー農業・農村を舞台にした交流活動の重要性	単	2007年10月	ニューカントリー2007年10月号	農業・農村を舞台にした交流活動の拡がりには、日本における農業・農村のサポーターの人的ネットワーク展開の基礎となる。	
農村地域における農業・農村体験の意義	共	2008年10月	拓殖大学論集 271号 「人文・自然・人間科学」第20号	農業・農村体験の取組みの主要な現場、農業・農村体験の交流現場が農村地域にとって、この取組みがどのような意義を有しているのかを北海道長沼町の事例に基づいて考察している。(p.116-128)	
北海道のグリーン・ツーリズムの実態と展望	単	2009年12月	「食の安全安心とグリーン・ツーリズム」(地域拠点型農学エクステンションセンター発行)	余暇滞在型を初発の志向としながら、農業体験型が盛況となる北海道のグリーン・ツーリズムの実態と展望を明らかにしている。	
農業体験型グリーン・ツーリズムとコミュニティビジネス	単	2011年3月	松本・荒又編『北海道再生のシナリオⅣ』(北海道雇用経済研究機構発行)	主に長沼町の農業・農村体験の取組みを事例に、農業体験型グリーン・ツーリズムのコミュニティビジネスへの可能性を指摘。	
<報告> 拓殖大学北海道短期大学シンポジウム『地域振興について考える』	単	2016年2月	拓殖大学政治行政研究第7巻	2015年11月6日に開催された本学創立50周年企画のシンポジウム報告。	

研究業績(過去3カ年分)

著作数	論文数	学会等発表数	その他	国際的活動の有無	社会的活動の有無
	2	0	1	無	有

学内運営業績

1 役職、各種委員会等 (主要10件程度)	1999年度～	総合委員会委員
	2009年度～2012年度	環境農学科長
	2009年度～2010年度	就職委員
	2009年度～	自己点検・評価委員
	2013年度～	入試広報委員
	2016年度～	奨学生委員
	2016年度～	FD委員

学外活動業績

1 本学以外の機関(公的機関・民間団体等)を通しての活動 (主要10件程度)	2004年2月～現在に至る	そらちDEい～ねアドバイザー
	2009年7月～2013年7月	北海道子ども農山漁村交流プロジェクト推進協会会長
	2010年11月～2013年3月	黒松内町まちづくりアドバイザー
	2011年1月～2012年3月	深川市新しいまちづくり市民協議会委員
	2012年6月～現在に至る	元気村地域づくり研究所所長
	2014年12月～現在に至る	ふかがわ地域資源活用会議オブザーバー
	2004年4月～現在に至る	スローフード・フレンズ北海道会員
2 学会・学術団体等の活動 (主要10件程度)	1975年4月～現在に至る	北海道大学哲学会 会員
	1975年4月～現在に至る	北海道哲学会 会員
	1999年11月～現在に至る	社会文化学会会員
	2008年7月～2010年7月	北海道大学哲学会 運営委員
	2008年7月～2010年7月	北海道哲学会 幹事
	2011年7月～2012年7月	北海道大学哲学会編集委員
	2015年7月～現在に至る	北海道大学哲学会 運営委員